

昔むかし、うんとむかし。あるところに、三人の兄弟がありました。一番上の兄は一郎治で、二番目は次郎治で、末っ子は三郎治といました。

あるとき、父親は、三人を呼んでいました。

「おまえたちも、もう、一人前の年ごろになった。いつまでも家にいても、何にもならない。三年のあいだ暇をやるから、思い思いに出世をして帰って来い」

父親は、三人に、旅のために、それぞれ小判を五枚ずつやりました。三人は、

「父さん、父さん、それじゃ、三年たったらかならず出世して帰って来ますから、元気でいてください」といって、旅立ちました。

三人は、すすきの穂が風になびく山道をずんずん歩いて行きました。すると、道が三つに別れている所にやって来ました。

「これから三人別々の道を行こうじゃないか。ちようど三年目の九月十五日にここで会うことにしよう」と、話がまとまって、一郎治は右の道を、次郎治は真ん中の道を、三郎治は左の道に行くことにしました。

右の道を行った一郎治は、しばらく山の中を歩いていましたが、やがて、大きな沼に出ました。沼には雁がいっぱいに下っていました。一郎治は、

「よし、あの雁をとってやろう」と考えて、石を探しましたが、見つかりません。そこで、ふところから小判を出して、ぶーんぶーんとぶつけました。小判を五枚とも投げましたが、雁には当たりませんでした。それでも一郎治はけるつとして、また歩いて行きました。

だんだん夜になって来るし、一郎治は、お腹もすいてきました。けれども、食べ物もお金もありません。しかたなく、道ばたのお堂の中に入って寝ました。

それからどれくらいたったでしょう。

「これこれ、一郎治、一郎治」と呼ぶ者があります。一郎治は、目を覚まして、声のするほうを見ました。けれども、だれもいません。

（なんだ。きつねかたぬきが、おれのことをばかにするんだな）と思って、また寝ていると、今度は、さつきより大きな声で、

「一郎治、一郎治」と呼びました。よく見ると、お堂のすみっこのほうに、ぶっかけたお椀わんが転がっていて、こいつが、呼んでいるのです。一郎治が、

「なんだ。おれを呼んだのは、おまえか。おれはまた、きつねかたぬきだとばかり思っていた」というと、お椀は、

「ふふん、なんでもいいじゃないか。おまえ、銭一文持たないで、いつまでも着の身着のまま歩くわけにはいくまい。どうだい、これから、おらといっしょに仕事をしないか」といいました。

「なに。おまえに、何の仕事ができるんだい」

「いいから。おまえは、おらのいうとおりにさえすりやいいんだ」

つぎの日から、夜になると、一郎治は、ぶっかけお椀をふところに入れて、町のほうへ出て行きました。そして、お椀にいわれたとおり、金持ちの屋敷の前まで行きました。屋敷の人たちが、寝静まっているのを見とどけると、一郎治は、ねこのくぐり穴あなから、お椀を家の中に入れました。お椀は、中から戸を開けました。一郎治は、屋敷の中に入って、お金や宝物をこっそりもらって行きました。

こうして、一郎治は、どろぼうの名人になりました。

さて、真ん中の道を行った次郎治は、心細くなって、早く人里ひとぢりに出たいと思いました。なるべく広い道、広い道と歩いて行きましたが、いくら歩いても人里には着きません。だんだん夜になって来たので、道ばたの草の上に座りこみました。ぼんやりしていると、おしりの下で、

「これこれ、次郎治、次郎治」と呼ぶ者があります。次郎治が、飛び上がって、おしりの下あたりをよく見ると、しゃもじが一本、落ちていました。次郎治が、

「なんだ。おれを呼んだのは、おまえか。びっくりするじゃないか」というと、しゃもじは、

「なに、そんなにびっくりするな。おらがいいことを教えてやる。ここから一里いちりばかり離れた所に長者の家がある。そこのお姫さまが病気になって、医者よ、坊主よ、山伏やまぶしよと、毎日毎日治療したり拝んだりしているが、いっこうに治らない。けどな、お姫さまの病気を治すのはわけないのさ。おらを裏返しにして、お姫さまのおしりをちよつとなでると、たちどころに治るんだ」といいました。

「表でなでるとどうなるんだ」

「病気がかえって悪くなる」

「でもなあ。お姫さまのおしりなど、なかなかでられるもんじゃないぞ」

「ふだんはそうかもしれんが、今は今日死ぬか明日死ぬかという病気だから、なでさせ

てくれる」

次郎治は、しゃもじをふところに入れて、長者の家に行きました。門の外まで、お姫さまのうなる声が聞こえました。お姫さまの病気を治しに来たというと、すぐに部屋に通してくれました。

次郎治は、お姫さまの床のまわりに屏風を立ててもらって、人ばらいをすると、しゃもじの裏でお姫さまのおしりをなでました。たちまち、お姫さまはけろりと治ってしまいました。長者は大喜びで、

「あなたは、娘の命の恩人だ」といって、下へも置かぬもてなしをしてくれました。そして、とうとう、次郎治は、お姫さまの婿さまになりました。

さて、左の道を行った三郎治は、山の道をぐんぐん歩いて行きました。行けども行けども山ばかりで、そのうち日が暮れてきました。夜風が、薄気味悪く、松の木をごろごろ鳴らしました。三郎治は、一日歩いてくたびれたので、松の木の下で寝ることにしました。そのとき、にわかには、あたりの草がさがさとなびかせて、生ぐさい風が吹いて来ました。三郎治が、はっと思つてふり向くと、山のほうから、大蛇が、二本の真つ赤な舌を出して、でんぐでんぐとひっくり返りながらやって来ました。

「こりや、たいへんだ」

三郎治は、いそいで松の木に登って隠れました。大蛇は、長い舌をべろべろ出して松の木を見上げていましたが、ついに三郎治を見つけて、ぐりぐりと木を巻き始めました。

三郎治が、

「どうしよう」と思っているうちに、大蛇は、だんだん、だんだん、登って来ました。

三郎治は、

「なんまいだ。なんまいだ」と唱えながらふるえていました。大蛇は、三郎治をひとのみにしようと大きな口を開けました。そのとき、三郎治の帯がゆるんで、ふところに入れておいた五枚の小判が、大蛇の口の中にぼたん落ちました。大蛇は、金物が口に入ったので、苦しんで、ぐるりぐるりと下に落ちて行きました。

そこへ、お殿さまが、おおぜいの家来を連れて通りかかりました。お殿さまは、大蛇が苦しんでいるのを見て、三郎治にいました。

「こりや、えらいえらい。今までこの大蛇のために何人の人が難儀したか分からない。

それで、退治に来たのだが、おまえが退治してくれて助かった。わしの家来になつてくれ」

三郎治は、お殿さまについて都に上りました。そして、侍になって、悪者を退治する役目をおおせつかりました。

月日の経つのは早いもので、三人が旅に出てから三年目の秋が来ました。

一郎治は、どろぼうの名人になっていましたが、盗んだ物はみな貧しい人にくれてやって、自分は、ぼろぼろのわかめの行列みたいな着物を着て、ぶっこわれた古家ふるやに暮らしていました。ある晩、一郎治は、ぶっこわれた縁側えんがわに腰かけて、ため息をつきました。

「おれは、こんな事ばかりして、三年たったが、今ごろ、父さんや弟たちはどうしているだろう。約束した限りは、家に帰らなくちゃならないが、こんな成りなでは顔向けがでない。何かひと盗みして、みやげと着る物を手に入れよう」

一郎治が、こうひとりごとをつぶやくと、ぶっかけお椀が、

「よしよし、今晚、うまくやってやるから、心配するな」といいました。

さて、次郎治は、長者の婿さまになって、しゃもじで村の病人を治しては、喜ばれていました。ある晩、次郎治は、縁側に腰かけて、丸い月を眺めていました。

「きょうは、八月の十五日だなあ。今ごろ、父さんや兄弟たちはどうしているだろう。家に帰る約束の日は、九月十五日。約束の日に帰らなくちゃならない」

次郎治は、こう思いついて、さっそく五百両というみやげを用意してその日を待ちました。

三郎治は、侍になってお殿さまに仕えながら、しきりに故郷の家に帰ることを考えていました。九月になって、いよいよ明日は旅立とうとしていたとき、長者の家から、五百両のお金が盗まれたという知らせが入りました。

三郎治は、盗人を探しに出ました。そして、わかめの行列みたいなぼろを着た汚いどろぼうを捕まえました。どろぼうにいろいろたずねているうちに、それは、一番上の兄さんの一郎治だということが分かりました。そして、五百両を盗まれて訴え出たのは、次郎治でした。三人は、たいそうおどろきました。つぎの日、父親が呼び寄せられました。父親と三人の兄弟は、抱き合って泣きました。

こんでよんつこもんつこや

村上郁再話

資料『郷土の伝承第二輯』宮城県教育会